



ミレイユ・マチューは不思議な魅力を持った歌手です。フランスにはたくさんシャンソニエがいますが、それぞれさまざまな個性の持ち主ばかり。誰かの虜になったらもうおしまい。それこそ朝から晩まで聴いていなければ気がすみません。その気持ちは特別のファンならずとも理解出来ることでしょう。それほどシャンソン・フランス音楽は聞き手の心情にフィットしてくるのです。マチューはといえば、個性という点だけでいえば、グレコやブリジット・フォンテーヌなどという頑固なまでの個性と比較した場合にはそれほど強烈な個性の持ち主とはいえません。けれども聞き込んでいるうちにマチューは非常に人間味溢れる歌手であることがわかってきます。イボンヌ・ジョルジュからサッフォーまでシャンソンに耳を傾けようとする人にとってはまさに百花繚乱のシャンソン界ですが、マチューだけはその誰とも対立せず、そして誰かと同化してしまうというようなこともなく、自分の居る位置をきちんと保っているタイプの稀な歌手であるといえましょう。

ミレイユ・マチューの歌声はいつもひたむきで小手先だけの細工をしないところが大きな特徴であり魅力といえます。声量を思い切り使った歌は一種のさわやかさとなって迫ってきます。このことはしばしば批判的な意味で使われたこともありますが、こうしたストレートな唱法で勝負する歌手が少なくなった昨今、逆にマチューのような歌手を聞きたくなる方が自然ではないでしょうか。もっともその証明は多くのレコード吹き込みやその売り上げ、ステージの観客動員数などですでに済んでいるとも言えましょうが。もう一つの証明としてマチューは多くの大物のミュージシャンにも愛されているということも挙げられるでしょう。マチューのデビューシングル「愛の信条」ではポール・モーリアから曲をもらうという幸運を得たり、モーリス・シュバリエもまたマチューを我が娘のように愛し、多大な助力をしています。その他にもポール・アンカのプロデュースを得たり、エンリコ・モリコーネの全面的な協力を得たアルバムを製作したりして、マチューの才能がそうしたミュージシャンの創作活動を呼び起こしたということは特筆に値します。

もうひとつマチューの魅力は彼女のレパートリーの幅の広さにもあるといえるでしょう。マチューは自分の歌う曲